長崎医療センター
NAGASAKI MEDICAL CENTER NEWS

専齋 SENSAI

2022 MARCH VOL.400

発行所
独立行政法人国立病院機構
長崎医療センター
〒856-8562
長崎県大村市久原2丁目1001-1
TEL 0957-52-3121
FAX 0957-54-0292



令和3年度第50期臨床研修医修了式が3月24日に執り行われました。
臨床研修修了おめでとうございます！！

定年退職を迎えて

江﨑 宏典
安日 一郎
堤 圭介
有岡 雅之
岸川 貴司
廣岡 恵子
小原 智子

TOPICS

・日本乳がん学会九州地方会を終えて／研修医受賞報告
・研修医受賞報告
・臨床研修修了報告
・医師人事異動（転出）

寄稿

看護部だより Vol.39
医療相談支援センターからのお知らせ

長與 專齋（1838年～1902年）
大村藩御殿医の家系に生まれる。緒方洪庵の適塾に学び、福澤諭吉の後を襲い塾頭となる。初代衛生局長として我が国の近代医療制度の確立に尽力した。衛生という言葉をはじめて採用したのも專齋である。專齋の生家は「宜雨宜晴亭」と呼ばれ、長崎医療センター敷地内に移築されている。

定年退職を迎えて

退任のあいさつ
～千燈照院と宜雨宜晴～

院長　**江﨑 宏典**

令和4年3月末をもって長崎医療センターを定年退職いたします。平成元年に赴任し、平成16年から川崎医科大学に異動した3年間を除き、今日まで30年間勤務させていただきました。いつかは病院を離れる日が来ることはわかっていましたが、定年までのカウントダウンが始まると寂しいというか複雑な心境です。

10年前に院長を拝命した際に病院の運営方針としてどんなフレーズがふさわしいかとあれこれ考えました。前院長の米倉先生は「風格のある病院」ということをいわれていました。病院の方向性を端的に示す素晴らしい言葉だと思います。いろいろ考えるうちに「一隅を照らす　一燈照隅」という伝教大師最澄の言葉に出会いました。一人一人がそれぞれの持ち場を照らし、努力を重ねることで社会に貢献することができる。長崎医療センターには千人を超える職員がいます。一人一人が自分の役割を果たし、千人の力が結集されることで素晴らしい病院となり、地域医療に貢献することができる。団結する力、チーム力を生かして頑張っていこうという思いを込めて「千燈照院」～長崎医療センターの千人の職員一人ひとりがその責任を全うし、光り輝く病院に～というフレーズにいたしました。

また病院運営にあたって特に力を入れていきたいと考えたのはチーム医療の推進、医療安全そして人材育成でした。特に人材育成は当院のような地域の拠点病院においては義務ともいえるものであり、地域社会に対する責任を果たすことであると信じています。

院長就任から10年が経ち、病院運営はどうだったのか、成果はあったのかと自問しています。この10年間いろいろなことがありました。特に最後の3年間は多剤耐



性アシネトバクターによる院内感染の発生、そして新型コロナウイルス感染の蔓延と大規模災害にも匹敵するような事態に見舞われました。しかしこの危機的状況を一致団結し、皆さんと結束することにより乗り越えられたと思っています。長崎医療センターの底力とチーム力の大切さを実感でき、大変嬉しく思っています。

長崎医療センターは昭和17年（1942年）に大村海軍病院として設立され、その後何回かの名称変更を経て、記念すべき80周年を本年迎えます。またわが国の近代医療制度の基礎を築いた長與専齋先生の旧居跡が病院敷地内に保存されています。このように歴史ある長崎医療センターで長年にわたり勤務できたことを大変嬉しく、また誇りに思っています。長與先生の旧宅には「宜雨宜晴」と記された扁額が飾られていました。今後の医療を取り巻く環境はこれまで以上に厳しいものがあろうかと思います。しかし一致結束して目標に立ち向かい、また「雨も宜し、晴れも宜し」のようなおおらかで広い気持ちも忘れることなく、これからも素晴らしい病院であり続けて欲しいと願っています。わたくしも微力ですが陰ながら応援していきたいと思っています。

最後になりますが皆さんのご理解とご協力をいただき、院長職を全うすることができ、感謝の思いでいっぱいです。長崎医療センターの今後ますますの発展と職員の皆さんのご健勝を祈って、退任のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

大村市市制80周年記念大村市表彰式にて、特別表彰を受賞されました。おめでとうございます。

長与専斎賞
江﨑 宏典

多年にわたり長崎医療センター院長として、地域医療の発展に尽力し、高度医療の提供・人材育成等に献身的に取り組み、新型コロナウイルス感染症対策では卓越した管理指導力を発揮するなど、長与専斎の意思を継ぎ、市民への安全安心な医療の提供と本市の地域医療の発展と充実に多大な貢献をされました。





産婦人科部長
安日 一郎

1981年、鹿児島大学を卒業後直ちに長崎大学産婦人科に入局しました。周産期医療という言葉自体がまだ目新しい時代で、私が産婦人科医として過ごした最初の10年間は、まさに周産期医学のイノベーション（胎児心拍数モニタリングや胎児エコーの導入による胎児医療の隆盛とサーファクタント療法をはじめとした新生児医療の進歩）を目の当たりにし、その日進月歩によって日本の周産期死亡率が年々確実に低下していることを、日々の現場で実体験できた幸せな時代でした。最初の10年間のうちの3年間を当院（当時は国立長崎中央病院）で過ごすことができたのはさらに幸運でした。私が周産期医療の師と仰ぐ増本義先生（故人、当時小児科・未熟児センター部長）との出会いが、その後の私の医師人生を決めることになります。増本先生から学んだことは、周産期医学を越えた二つの概念でした。一つは、医療の地域化（彼はregionalizationと呼んでいました）という概念です。今日の周産期医療ではあたりまえのことになっていますが、当時、長崎県は増本先生の指導のもと全国に先駆けて母体搬送システムを構築し、周産期死亡率の低さでは全国トップクラスでした。もう一つは、医学論文の読み方とその臨床への応用の考え方です。まだエビデンスという言葉が使われていなかった当時、これはまさしくEBMの概念を先取りしたものでした。その後、大学に戻って、その旧態依然さに悶々とした日々を過ごす中、その悶々を払拭しようと1995年から3年間、米国ブラウン大学に留学しました。そのとき米国ではEBMの嵐が席巻していました。「ああ、これは増本先生から教わったものだ」と感銘を受けたことをよく覚えています。誤解のないように付け加えますが、このEBMの概念は、今日の医療界を覆い尽くしている「ガイドライン医療」とは対極のものです。

帰国後2002年、大学医局を退局し希望して当院に赴任しました。赴任当初から、増本先生から教わった周産期医療の概念を、さらに発展させることが私のミッションでした。ややもすると「寄らば大樹の陰」に流れゆく中、今日、無事定年を迎えることができたのは、この20 年間の私のミッションを支えていただいた、楠田展子先生（昨年定年退職）、山下洋先生、福田雅史先生、菅幸恵先生、杉見創先生、山口純子先生、古賀恵先生、福岡操先生、倉田奈央先生、すでに当院を離れた幾人かの産婦人科医の皆さんのおかげです。同じ産婦人科医である女房は、「あなたほど幸せな産婦人科医人生はないわ」と云います。あらためて皆さんに感謝申し上げます。そして4B病棟の土台を支えていただいた多くの助産師、看護師、クラークの皆さんに深くお礼申し上げます。なお、定年後再雇用というかたちで、あと数年は当院で産婦人科医として働く予定です。

最後に、私が若い医療人を対象にした講習会などでメッセージとしていつも云っている言葉を書き残します。

「結果とバイアスに左右されるな！思考と検証、そして感性をみがけ！」



脳神経外科部長
堤 圭介

15年間たいへんお世話になり、ありがとうございました。急患や緊急手術が多い科ですので、救命の先生方・麻酔科の先生方・手術室やICU/3Bのスタッフの方々には特にご迷惑をおかけしたものと思います。この場をお借りして、深謝させていただきます。

最後の数年間は体調を崩したり自分自身が手術を受けることになったりで、脳神経外科の若い先生方にもご迷惑をおかけいたしました。実質的にはマイナス1で6人態勢での診療となってしまいましたが、後輩の先生方の技量向上やNPの方々のご協力のおかげで安心してお任せすることができました。ありがとうございました。

新年度からは、微力ながら、長崎の地域医療に少しでも貢献できればと考えております。今後ともよろしくお願い申し上げます。本当にありがとうございました。



事務部長
有岡 雅之

昭和56年4月に厚生省に採用されて以来、九州管内の施設を転々としながらも幸い健康に恵まれて定年の日まで勤め上げることができたのも、多くの方々の支えがあったからこそと心から感謝申し上げます。

最後の2年間は新型コロナ感染症に翻弄されながらも、最前線でコロナと闘う長崎医療センターの一員として微力ではありましたが関わることができ大変嬉しく感じております。ただ一緒に定年を迎える同期の仲間と最後に会うこともなく、何とも言えないひっそりとした定年を迎えることは想定外でしたが、これも人間万事塞翁が馬と思って4月からの新しい職場でも前向きな気持ちで取り組めたらと思います。

最後に、新型コロナウイルスの一日も早い収束を願い、また、職員の皆様のご活躍とご健勝並びに長崎医療センターの益々の発展を祈念し、定年退職に際してのご挨拶と致します。



高度救命救急センター
岸川 貴司

私が就職した30年前は国立病院長崎中央病院という名称で、古い建物の病院でした。救急を希望し、配属されたのが当時の救命病棟でした。救急専属医がいない病棟で、現在の医療体制・治療法・看護とは程遠いものでした。年々救急医療とME機器が目まぐるしく進歩した時期だったと思いますし、必死についていったように思います。一番に思い出されるのは、全国で11番目、九州では久留米大学病院に続き2番目のドクターヘリ導入でした。立ち上げから関われ、フライトナースの教育が確立されてなく手探りで症例ごとの経験をスタッフで共有し学びを深めていき、実践していたように思います。また、全国の、得に九州のフライトナースとは定期的な学習会の開催の企画・実施、情報共有しフライトナースのレベルアップに関わってこられたことが思い出されます。私は今までかかわっていただいた医師の方々、上司・同僚看護師、助手さんに支えられたことで、希望部署である救命救急センターから移動することもなく長年働くことができ、感謝したいと思います。ありがとうございました。更に長崎医療センターの発展を願います。

今後は、また違った分野で医療に関わっていきたいと考えており、まだまだ医療センターにはお世話になることがあると思います。その時は、よろしくお願いいたします。



9A
廣岡 恵子

平成4年に北5病棟（内科一般）に途中採用となり、内科、外科、未熟児と様々な部署を経験し、9A病棟で看護師としての最後を迎えることとなりました。この約40年色々なことがありました。

旧病院は年代物で、天井は低く、パイプの配管などが外にむき出しになっていたり、更衣棟が遠かったので、夜に帰るのが暗くて怖かったり寒かったりしました。（それを知る人も少ないでしょうけど）また、旧病院での年越しそばがおいしかった!!どの職場でも色々なハプニングがあり、先輩たちと2泊3日のスキー旅行のレクレーションに参加したり、長いようであっという間の楽しい日々でした。

退職してからは、ここ最近できていなかった事（バイクに乗ったり、ゴルフをしたり、海外や温泉旅行に行ったり）を、ゆっくりやっていきたいと思っています。人生は楽しんだ者勝ち!!最期は笑っていたいですね。コロナ禍のなかで皆さんも窮屈な生活を強いられて大変ですが、もっとお体をご自愛ください。また、どこかで会えますように。

8A
小原 智子

在職中は大変お世話になり、ありがとうございました。国立小浜病医院から転勤して、21年間という期間でありましたが、退職まで勤務できた事は師長さん方を始めとする多くのスタッフや職場の先生、家族のおかげと感謝しています。

肝臓内科に長い期間勤務させて頂き、患者さんと家族の方と一緒に関わった看護や処置は大切な宝物です。今まで思えば、失敗した時などは落ち込んでいましたが、まだまだ足りない自分がいることに気づくことができ、看護への思いがより楽しく深まりました。

まだ退職の実感はありませんが、4月1日には「退職した。」と思うことでしょう。

本当にお世話になりました。皆さまのご健康とご活躍を祈ります。

TOPICS

第19回日本乳癌学会九州地方会当番世話人を担当して

乳腺・内分泌外科部長　前田 茂人

2022年3月5-6日、コロナ第六波中またロシアのウクライナ侵攻という暗い時期ではありましたが、出島メッセ長崎にて、現地およびwebのハイブリッド開催としました。これから開会のあいさつという時に、web配信用器材の電源トラブルが発生し、出鼻を挫かれた感じでしたが、その後は大きなトラブルもなく、皆さまの協力のもと進行していきました。二日間の参加者は288名、そのうち1/3が現地参加であり、久しぶりの対面形式に現地に来られた方は喜んでおられました。長崎医療センターからは、医師、薬剤師、栄養士の5演題の発表がありました。特に医学生・研修医セッションでは、フロアからの質問にも熱が入り盛り上がりました。学生、研修医とは思えない、素晴らしい発表ばかりでしたが、その中で福井謙介先生が優秀賞を受賞しました。

学会開催にあたり、江﨑院長をはじめ、多くの方々に支援していただき学会を遂行することができましたことに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

研修医受賞報告

2年次研修医　福井 謙介



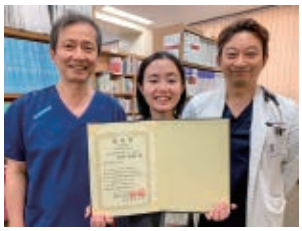
第19回日本乳癌学会九州地方会にて、「**胎盤転移を認めた妊娠期進行乳癌の一例**」という演題で発表し、研修医奨励賞をいただきました。産婦人科で研修をしている時に経験した症例で、より深く勉強したいと考え、乳腺・内分泌外科部長の前田先生に相談したところ、学会発表の機会をいただきました。妊娠27週5日で来院され、乳癌StageⅣの診断となり、帝王切開術で分娩に至りましたが、母体は死亡、胎盤への転移も認めた症例でした。

資料の収集や抄録の作成に当たって、外科の先生方をはじめとして、病理診断科三浦先生や産婦人科山下先生、小児科末永先生にもご指導いただき、当日は自信をもって発表できました。多くの先生方のお力をお借りして、細かいところまでご指導いただけた結果であり、自分としては初期研修の総まとめのような発表になったと思います。その中で、このような賞をいただけたことはとても光栄であり、今後の大きな励みとなりました。コロナ禍で現地開催での学会は初めての参加でありましたが、他の演者の発表もどれも興味深いものばかりで大変貴重な機会となりました。ありがとうございました。

TOPICS

研修医受賞報告

2年次研修医　吉岡 瑞姫



2022年2月4日～ 5日に、久留米大学主催の第62回日本肺癌学会九州支部学術集会がオンラインで開催され、「**腸型肺腺癌の2切除例**」という演題で発表し、一般演題で優秀賞をいただきました。呼吸器外科をローテートした際の1例目として遭遇し、下山先生監修のもと院内学会で発表したところ、田川先生もお声かけくださり、過去当院で経験した1例を加えて院外で発表する機会をいただきました。

当日は初めての院外発表、かつオンラインでとても緊張しましたが、一緒に参加し先に発表となった研修医尾上先生の、非常に落ち着いており研修医と名乗らなかったこともあって一外科医として質問の集中砲火を受けている姿を見て気合いが入りました。真横で無言の激励を受けながら研修医と確実に名乗り、他の先生方に知識や経験で劣る分大きな声で発表することを心がけ、質疑では準備不足だった箇所は勉強した知識をフル活用して乗り切りました。研修医修了間際にこのような機会と賞をいただけて幸甚の至りであり、来年度から専攻医として働くことへの大きな励みとなりました。ご指導くださいました先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

2年間を振り返って

臨床研修 修了報告



2年間の初期臨床研修を終え、医師としてそれぞれが専門分野を定めて歩き始めるスタート地点に立ちました。
各科の印象に残った出来事を思い出とともに振り返りました。

心臓血管外科

日々の予定手術や術前術後の病棟管理に加え、緊急症例も経験させていただきました。心臓手術はダイナミックでありながら非常に繊細で、1例1例が心に残るものでした。綿密な手術プランニング、ハードな手術から、術後は泊まり込みで患者さんを診て、その後も毎日足繁くベッドサイドに足を運び、術後管理を行う先生方の姿から、心臓外科についてだけでなく、医師としてのあり方についても学ばせていただきました。先生方の体力面、精神面のタフさはとても印象的でした。心臓血管外科での経験を活かし、将来は心外の患者さんも安心して任せていただけるような集中治療医を目指し、研鑽を積みたいと思います。

前原 洋順



循環器内科

当院の循環器内科では、カテーテル検査、治療に携わります。穿刺やCAGまで経験させていただきました。不整脈もカテーテルアブレーション治療を行っており、メンバーとしてかかわらせてもらいました。指導医の先生方は親しみやすく、循環器的な考え方だけでなく、問診の仕方、ICの仕方等医師として基本的な部分を多く学ばせていただき、充実した研修となりました。

福井 健介

泌尿器科

泌尿器科研修にて、実技を含めて様々な事を学ばせて頂きました。特にバルーンの挿入に関しては、「ゼリーたっぷりで、しっかりのばす」を徹底する事で、多大なる自信を得ることが出来ました。研修中はコロナが少し落ち着いていたこともあり、先生方とプライベートでも楽しく過ごすことが出来ました。

松島 俊樹

救急科

救急科では救急外来での初期対応や重症度評価、ICU管理など多岐に渡って学ぶことができ、とても充実した研修期間でした。上級医の先生方がお忙しい中時間を見つけてはフィードバックやレクチャーをして下さり日々知識を積み重ねることができました。個人的に専門を決めるきっかけになった研修となり感謝申し上げます。

後藤 大輔





総合診療科

総合診療科では、３ヶ月間を通して幅広い疾患に触れ、勉強の日々でした。医学的な面に加え、社会的問題やEBMなど、総合的に学ぶことができました。教育に熱心な先生方のフィードバックもあり、医師として最も基礎の部分を得られました。この経験は今後どの診療科でも自信につながっていくと思います。

野口 大気

小児科

自分は小児科に進むことを決めていたので、一般小児では採血・ルート確保や検査に伴う鎮静薬使用など、将来を見据えた知識や手技を学ばさせて頂きとても勉強になりました。NICUでも各種検査や新生児蘇生法含め、新生児に関するたくさんの知識と手技を経験できました。小児科の先生方は皆さん優しく、充実した小児科研修を送ることができました。

高橋 潔

放射線科

研修医向けの画像診断の教科書はキー画像がピックアップされ印までつけられており病変が一目でわかりますが、実臨床では病変を自分の力で探し出す必要があります。読影の仕方を学ぶ機会は意外に乏しく、じっくりと学び、みっちりと鍛えられた貴重な研修期間でした。

大嶋 智洋

外科

不安もありつつスタートした外科研修でしたが、先生方をはじめスタッフの皆様も和気藹々とした雰囲気で振り返るとあっという間の３ヶ月でした。術中も丁寧に指導していただき、手技もできそうなものはどんどんさせていただいて自分の成長を感じることのできる充実した期間となりました。所属したチームの先生方はもちろん、他チームの先生方からも目をかけていただき、研修を心から楽しむことができました。

尾上　祐大

麻酔科

気管挿管や動脈ライン確保など、なかなか普段の診療では行えない手技を経験させていただきました。先生方は皆さん個性的で、どの先生も教育熱心で優しい方ばかりでした。はじめのほうは中々手技もうまくいかなかったり、薬剤の使い方も分からず、不安に思うことが多かったですが、先生方のご指導のおかげで、なんとかできるようになりました。

松本 泰葉

肝臓内科

２ヶ月間の研修の中で内視鏡をさせていただいたり、腹部エコーを丁寧に教えていただきました。また疾患のことだけでなくサマリの書き方などもお忙しい中、ご指導いただき勉強になりました。教えていただいたことを今後に活かしていきたいと思います。

森 眞美子



形成外科

優しく、時に厳しく先生方には指導していただきました。糸、針の選択から汚染創、開放創の対応まで幅広く勉強することが出来ました。外科系にすすむにあたり正確な創部の評価は患者さんの整容だけでなくQOLの向上に繋がると思いました。１針に向き合う姿勢を、手技を通して学ぶことが多い１ヶ月でした。２年後に手術した創部が分からなくなるような手技を学べるのはここだけだと思います。

橋口 元一

脳神経外科

脳卒中、脳腫瘍、頭部外傷、水頭症、てんかんの外科治療のほか、画像読影や頭痛・めまい診療の講義、論文執筆や学会発表のご指導 等々、１ヶ月と短い中、今後の医師生活に必要な多くのことを学ばせていただきました。医師としての基本姿勢に関しても熱意あるご指導をいただき、本当にありがとうございました。

副島 航介

血液内科

さまざまな化学療法の中からどのレジメンを選択し、また効果判定や副作用へのケアをどのように行うかなど、広く充実した学びを得ることができました。血液疾患においては長い経過の中でつらい症状や副作用に悩むことも多く、そうした中で患者さんやご家族との信頼関係を構築し、大事にされている先生方の姿が印象的でした。

中村 孝明

産婦人科

エコーや診察などの手技、手術、外来での問診、カンファなど多忙な日々でしたが学ぶことも多い日々でした。妊娠出産がこんなにも命懸けであるということを、知識としてではなく実感として学べた大変有意義な1か月でした。貢献できた部分は少なかったと思いますが、何よりも毎日が本当に楽しくて、とっても充実していました。

大木 雅晴

呼吸器内科

研修が始まって一番最初にまわったので、大変思い出深い科です。病院では迷子になる、電子カルテもろくに使えない私に先生方は時間を割いてご指導してくださいました。特に、初めて患者さんでさせていただいた気管支鏡は、当たり前のことですが、予習で見たCT画像とリンクしていて大変たのしかったです。

熊谷 知香



消化管内科

3ヶ月の研修で消化管出血やイレウス、悪性腫瘍など多くの疾患を経験しました。中でも癌患者は精神面の変化も大きく、患者との接し方や説明の仕方なども学ばせていただきました。また、緊急内視鏡治療を含め様々な内視鏡検査・治療を見学でき、実際に内視鏡を施行する機会もいただきました。先生方には手厚くご指導ご鞭撻いただき、非常に研修しやすい環境でした。

南部 生妃

脳神経内科

当院は急性期病院であり、脳卒中を疑う方々の対応を上級医の先生方と一緒に診察させていただきました。NIHSSスコアやMRI画像を読みながら梗塞している部位を評価することは今後必須となってくるスキルであり、研修初期に学べてよかったと思っています。そのほかにも脳波の読み方の基礎や筋電図、変性疾患のスコアリングなどと幅広くご指導いただきました。

吉岡 瑞姫



リウマチ・内分泌代謝内科

1年次の4月にローテートさせて頂きました。リウマチ・膠原病内科では幅広い症状を呈する膠原病の難しさとステロイドを使用する際の起こりうるトラブル等を学ばせて頂きました。内分泌・代謝内科では糖尿病の患者さんの血糖コントロールのみでは無く、生活・社会背景まで見据えた治療まで学ばせて頂きました。

野島 朋洋

耳鼻咽喉科

二年次の後半に1ヶ月間ローテートさせていただきました。先生方のご指導も優しく、明るく、熱心で、僕が研修した時は、気道異物など気道緊急の対応、気管切開とその後の管理、ファイバー、耳鼻科診察など将来、離島医として関わる可能性が高い事柄も広く学べました。耳鼻咽喉科はなかなか勉強する機会も少なかったため、今回実臨床で、勉強させていただいたことは今後に存分に活かしていけるよう努力していきます。

成松 隆

皮膚科

外来では毎日様々な疾患をみて、診断や治療の経過だけでなく、薬剤の使い分けを知り自分で試すことで、患者さんに合わせて選ぶことの大切さを体感できました。病棟では皮疹のコンサルテーションに必要な情報や、白癬や帯状疱疹の診断法を習得でき、とても有意義な研修期間となりました。沢山の情報を、楽しく惜しみなく教えていただきありがとうございました。

天野 栞



腎臓内科

末期腎不全の方の血液透析・腹膜透析管理の仕方などを学びました。また機会に恵まれ、腎移植前後の管理についても担当に入り教えていただきました。手技に関しては、シャント穿刺、PTA、FTLカテーテル挿入などを、先生方や透析室スタッフの方々に教えていただきながら経験することができました。

中村 昌平

整形外科

この2年間で2ヶ月間研修させていただきました。手術検討の際の患者説明から実際に大腿骨近位部骨折や大腿骨頸部骨折などの手術の手技や手術の流れを間近に見学することができ勉強になりました。また皮膚縫合する機会が多く整形外科の先生方には手厚くご指導していただきました。とても雰囲気が良い診療科で学ぶことができ、日々充実した研修をすることができました。

志田 泰一朗



精神科

精神科では今後私達がどの診療科に進んでも必要となる、病棟でのせん妄・不眠等々への対応や考え方を丁寧に教えて頂いただけでなく、精神科病棟特有の入院のルールや日々の診療について学ばせていただきました。外来に対診、レクチャーと今後の診療の糧となる研修を行うことができました。

日高 悠介

長崎医療センター第50期研修医の皆さん、研修修了おめでとうございます。

この2年間はコロナ自粛が続く中、通常の研修に加え、ワクチン接種や患者対応などコロナ診療の最前線でも活躍され、みなさん立派に研修を終えられました。世界情勢も不安定で、先が見えない現在ではありますが、これからの10年間は医師として人としてステップアップしてゆく大切な時期です。プロフェッショナルとしての自覚を持ち、”誠実な医師”の精神を忘れずに夢に向かってがんばって下さい。先生方のご活躍を楽しみにしています。

臨床研修管理委員長　長岡 進矢



研修医表彰一覧

賞状名	受賞者
最優秀研修医賞	南部　生妃
基本的臨床能力評価試験 最優秀賞	中村　昌平
OSCE最優秀賞	成松　隆
OSCE2位	前原　洋順
OSCE3位	中村　孝明



医師人事異動（転出）

医療職（一）医師

整形外科部長	熊谷	謙治
内科部長	長島	聖二
肝臓内科医長	阿比留	正剛
自己免疫研究室長	寶來	吉朗
脳神経外科医長	諸藤	陽一
呼吸器内科医長	三原	智
血液内科医長	蓬莱	真喜子
肝臓内科医師	戸次	鎮宗
外科医師	村上	俊介
精神科医師	橋口	知幸
整形外科医師	水光	正裕
呼吸器内科医師	朝野	寛視
小児科医師	宮副	祥一
麻酔科医師	飛永	祥平
泌尿器科医師	上田	康史
腎臓内科医師	明穂	尚基
産婦人科医師	倉田	奈央

医療職（一）レジデント・専攻医

小児科専攻医	吉川	創平
小児科専攻医	坂口	恭平
形成外科専修医	野口	美帆
産婦人科専攻医	清水	彩理
外科レジデント	哲翁	華子
外科レジデント	肥田	泰慈
脳神経外科専攻医	塩崎	絵理
総合診療科レジデント	土井	正直
総合診療科専攻医	宮森	龍誠
内科専攻医	吉原	聖智
循環器内科レジデント	大塚	開希
消化器内科専攻医	西原	敬仁
リウマチ科専攻医	大塚	瑞奈
内分泌・代謝内科専攻医	山﨑	悠介
腎臓内科専攻医	荒木	慎平
呼吸器内科専攻医	髙尾	亮太
皮膚科専攻医	草野	晋平
臨床検査科専攻医	添田	李子

寄稿

“桜切るバカ、梅切らぬバカ”

形成外科部長　藤岡 正樹

長崎医療センターは丘陵に建っているだけあって、緑豊かなところがすてきです。入り口近くには涼しげな常緑林があり、建屋は芝で囲まれ、駐車場には街路樹が配されています。なんといっても目立つのは桜ですが、6年前に5株植樹した駐車場口通用門の紅梅もすくすくと育ち、今年もたくさんの花をつけてくれ、いい香りを放っています。（写真1）

ところであかしや新館の向かい側、職員駐車場入り口近くの土手に立派な白梅があるのをご存じでしょうか。艶っぽい紅梅に対し、凛とした清楚な花をつけています。（写真2）

「桜切るバカ、梅切らぬバカ」という言葉があります。梅と桜はともにバラ科サクラ属の落葉広葉樹です。いわば兄弟樹なのですが、桜は枝を切るとそこから菌が侵入して花が咲かなくなるだけでなく枯れてしまう事があり、反対に梅は創傷治癒力が旺盛で、枝を切らないと良い実がつかないところからきている言葉です。これから転じて人にはそれぞれの特徴や性格があり、それに合わせて指導・教育をしないとうまく育たないという戒めでもあります。言ってみれば桜は虚弱なので、手取り足取り懇切丁寧に世話（指導）しなくてはならないのに対して、梅はビシビシ枝切り（指導）して育てるべきということです。

この意味で研修医が住まう「あかしや新館」に白梅が植栽されていることは象徴的です。若い先生たちが凛と清楚に逞しく育っていくのを見守ってくれています。



写真1



写真2

看護部だより Vol.39

新人看護師の成長

レベルⅠ担当副看護師長
堂口 香織、江濱 弥生、牧山 隼人

今年度のレベルⅠ研修生は新型コロナウイルス感染症の影響により、入職時のOff-JT(集合教育)が実施できずにスタートを切る形となりました。そのため、各病棟でのOJT(機会教育)について計画を立案し、実践していきました。

4月:組織で働く心構え

5月:医療安全と看護技術
患者さんの安全、安楽を第一に考えることが大切だということを学べました



6.7月:フィジカルアセスメント
ABCDを考えた観察、SBARでの報告を実践していきたいと思います



9月:メンタルヘルス
不安や悩みの共有、ストレス対処法を共有できました。



10月:チームステップス
チームで協力することの大切さを実感できました。



12月:医療安全(危険予知トレーニング)
1月:タイムマネージメント
3月:1年間の成長を共有し、
大切にしたい看護を語ることができました。



現在、研修生の多くは各部署において受持ち看護師として患者を担当し、これまでの11か月間に病棟や研修で学んだ知識を活かし、それぞれの看護観を持って関わることができています。新人看護師だからこその喜びや辛さ、悩みも多かったと思われますが、まずは1年間やり遂げたことを自分自身で褒めてほしいと思います。そして、自信を持って次年度につなげていけたらと願っています。

最後に、レベルⅠ研修を担当させていただいたことで、研修生にとって分かりやすく現場に活用できる研修企画・研修方法を思案する難しさ、研修生の反応や雰囲気を読み解き、適切な助言を必要とするファシリテーターを実施する重要性を学びました。また、数年前に新人だった頃の自分と重なり、ファシリテーターをしながら声援を送っている自分がいました。今後は、各部署でそれぞれの研修生と共に長崎医療センターの看護の質向上に向けて頑張りたいと思います。

長崎医療センター NEWS
NAGASAKI MEDICAL CENTER NEWS
https://nagasaki-mc.hosp.go.jp/
VOL.400

医療相談支援センターからのお知らせ

訪問看護ステーションと居宅介護支援センターへの見学実習を経験して

地域医療連携室　副看護師長　富永 裕美

私は令和3年度4月に地域医療連携室に配置換えになり、まもなく1年が経過しようとしています。この度、地域の訪問看護ステーションと居宅介護支援センターへ見学実習にいく機会をいただきました。



在宅実習では福祉用具やデイサービスを利用しながら生活している場面を見て、在宅療養のイメージを膨らませる事ができたことや、実際に病院で退院調整を行った後の自宅での生活を知る（看る）ことで入院時に行う入退院支援の重要性を再確認できました。今後は地域の医療福祉施設の皆様と密に連携もとりながら、拠点病院の退院支援担当者として、地域住民の皆様に貢献していきたいと思います。

医療相談支援センター係長　田中 圭

この度、大村市医師会訪問看護ステーション、大村市医師会居宅介護支援事業所の皆様のご厚意を受け在宅見学実習を行わせていただきました。ご多忙のところ実習を引き受けてくださり誠にありがとうございます。深く感謝申し上げます。これからは地域の皆様の力をお借りしながら、拠点病院から地域へ積極的に学びに行かせていただければ幸いです。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

理　念
高い水準の知識と技術を培い
さわやかな笑顔と真心で
患者さん一人一人の人格を尊重し
高度医療の提供をめざす

長崎医療センターの使命
長崎医療センターは以下の活動を誠実に行い、地域拠点病院として住民の皆さんと医療機関からの信頼を得ることを使命としています。
- 安全で質の高い医療を提供する
- 絶対に断らない救急医療の最後の砦となる気概を持つ
- 地域の医療機関、行政と密接に連携する
- すべての医療人と学生に魅力的な教育研修を提供する
- 臨床研究を推進し、国際医療協力に貢献する